

心の散歩道

施餓鬼とは すべての生きとし
生けるものへの感謝と思いやり

施餓鬼会(せがきえ) (施食会) は、多くの宗派においてお盆の期間に行われることが多いようですが、本来は特定の日に限定されたものではありません。ただお盆の由来である目連(もくれん)尊者の母にちなんだ話と、施餓鬼の由来である阿難(あなん)尊者が餓鬼に飲食を施した話が非常によく似ていることは事実です。

さて、施餓鬼の意味ですが、ことばどおり解釈すると、餓鬼道の世界におちて苦しんでいるものに、飲食を施す、ということになります。同時に、自分自身に与えられた生命(いのち)に感謝し、幸せを願うという意味もあります。人間のいのちは、米や野菜、肉に魚などを食することによって存在します。それらにももちろん生命があります。従って、この行事は人間だけの幸せを願うものではなく、すべての生きとし生けるものの生命を尊び、生かされて居ることを学ぶ教役でもあります。

現在の日本人は、自分さえ良ければよい 世話がないう という考えかたの人が多く、いように見受けませんが、決して自分一人では生きることが出来ません。また、世話とは、世間でよく言われる言いがさ 世間一般の話し言葉 が原義とされています。江戸時代から、面倒なさま やっかいなさま という意味に変わったようですが、人類の進化の中でホモサピエンスは、言葉が話すことが出来・情報を共有できたからこそ、人類の発展があり現在にいたりました。コミュニケーションや相手を思いやる心が無くなると人間では無くなります。

躰(しつけ)も、他の人を幸せにしてあげられますように という願いをもった人を育てる為の戒めですが、家族の有りようも変わってきました。家族という概念は最近になって形成されたもので、伝統的社会における生産単位を意味し、血縁のみの単位では無かったようです。北欧の農民たちは、婚姻家族より生産と居住に関連する集団や、仕事や地域にまつわる関係のほうを指向して家族と言うようです。現在は、核家族(夫婦や親子、兄弟などの血縁関係を基にする)を家族と定義しているようですから、自ずから躰の概念も変わってきましたね。

施餓鬼は、餓鬼道に苦しむものに飲食を与える行事にとどまらず、《袖擦れ合うも多生の縁》と言われますが、《多生》は《多少》とは異なり、何度も生まれ変わるといふ仏教の考え方からきていて、人の関係はこの世だけの偶然ではなく、前世や来世につながっている深い縁を意味します。数限りない縁とお陰(ささえ)で生かされてきていることに感謝し、七世の過去にわたる父母にいたるまでの、ご縁の有る仏を供養することにより、生かされている本質を学び、家族の絆を深めるご縁を築くためにも行われています。

